

「飛蚊症(ひぶんしょう)」は「ひもんしょう」とは読みません

今月は先月号の内容に続いて「飛蚊症解説の引用文の続編」です。それではどうぞ・・・(^-^)/

5. 飛蚊症の原因

飛蚊症をおこす硝子体の濁りは、生まれつきのものと生後できたものに分けられます。生後できるものには、年をとることによって生じた硝子体の変化によるものと、硝子体の周囲の出血や炎症性物質が硝子体内に入ってきたもの、遺伝性の硝子体の病気、全身の病気によっておこるものがあります。

飛蚊症の原因

生まれつきのもの	出生前の組織の遺残による
生後出現するもの	硝子体の年齢による変化にもとづくもの
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 離水 ・ 後部硝子体剥離・・・多い
	硝子体の年齢による変化以外の原因によるもの
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 硝子体出血 ・ ぶとう膜炎 ・ 網膜硝子体ジストロフィ ・ その他

6. 生まれつきの飛蚊症

胎児のうちは、硝子体の中に血管が走っています。この血管はふつう出産までにはなくなってしまう。ところが時にその血管の一部、あるいは血管周囲の組織の一部が生後も硝子体の中に濁りとして残ることがあります。

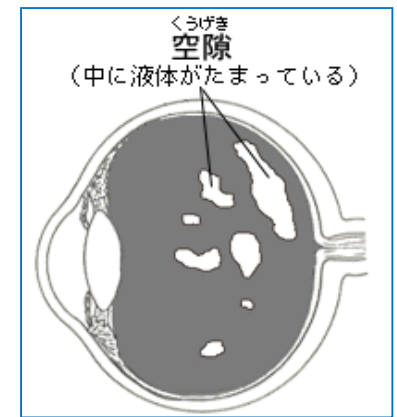
このような生まれつきの濁りは、視力さえ良ければ特に急いで治す必要もありませんし、時々検査をして異常がなければ放置していても心配のないものです。

7-1. 年をとることによっておこる硝子体の変化(1)

40代になると、透明なドロツとした玉子の白身のような硝子体は組成が変化し、硝子体の内に液体がたまった小部屋のようなものができてきます。これを「^{りすい}離水」といいます。

さらに年をとりますと、液体のたまった小部屋はどんどん大きくなり、一方硝子体そのものは収縮してしまいます。この硝子体の変化によって生じた硝子体の濁りが飛蚊症の原因になることがあります。

紙面の都合で、今回のフジタガンカニュースの引用文はここまでとなります。そこで、本文中に出てくる用語についての補足を少し…つまり「離水」によって「液体のたまった小部屋」ができる訳なのですが、右図の中ではこの「液体のたまった小部屋」の事を「空隙(くうげき)」と表現しています。つまり、本文中にはそういう文章表現は登場しませんが「離水によって、液体のたまった小部屋(=空隙)ができる事」が飛蚊症の原因の一つという事になり、この変化自体は「正常範囲内」という事になる訳です。しかし、「正常範囲内」という事は「治療することもできない」という事なので、基本「治らない」という事になります。何故なら、飛蚊症が「年を取る事」によるものであれば、治すために効果のある治療は「若返りのクスリ」という事になり…現代の医学ではそうした治療薬はありませんので悪しからず…という訳なのです。しかし、街中の薬局などでは「飛蚊症治します」的なノボリを目にすることがよくありますよね？これについては、一種の「カラクリ」があると僕個人は考えています。あくまでも私見ではありますが、その辺りの解説は次号のフジタガンカニュースに掲載の予定です。お楽しみにー(´-`)



今月のお知らせ

以前にもお知らせしておりますが、非常勤の先生が診察を担当する日程は①毎水曜午後を朝岡亮先生(東京大学眼科講師・専門：緑内障)②第1・3(・5)週目の土曜を小竹修先生(八王子医療センター・専門：網膜疾患)となります。ただし、都合により臨時変更があり、9/26(土)小竹先生10/28(水午後)藤田院長(朝岡講師が学会のため代診)と担当が変更になります。また、10/23(金午後)と10/24(土)は院長が学会出席のため休診10/30(金午後)は院長が第10小学校就学児健診のため休診となります。また、今年の年末年始の休診予定は左の表通りです。ご迷惑をお掛けしますが、宜しくお願い致します。

年末年始の休診スケジュール

	12/26	12/27~1/3	1/4
AM	○	×	○
PM	×	×	○
	※ ×・・・休診 ○・・・通常診療		



<http://www.fujita-ganka.com>

FUJITA-EYE-CLINIC 藤田眼科

エフ・ビジョン(コンタクトレンズ販売) P-Vision

①042 (645) 0575

②042 (642) 2911